

## 大教大キッズサマーキャンパス～子どものいる柏原キャンパス～

(代表者)

加藤 翼・櫻井 陽子

(分担者・協力者)

| 教員・事務                                 | 学生                 | プログラム名                  |
|---------------------------------------|--------------------|-------------------------|
| 英語教育講座 橋本 健一 先生<br>外国語学習支援ルーム 高田 恵子先生 | 英語教育の院生・学生         | 英語で遊ぼう！                 |
| 理科教育講座 生田 享介 先生<br>理教情報講座 乾 陽子 先生     | 理科教育の学生<br>自然研究の学生 | 昆虫を観察してみよう！             |
| 理科教育講座 深澤 優子 先生                       | モダン科学館の学生          | 体験！科学館！                 |
| 家政教育講座 小崎 恭弘 先生                       | 家政教育の院生・学生         | めざせ！泥団子マスター！<br>保育室で遊ぼう |
| 音楽教育講座 寺尾 正 先生                        | 音楽教育の学生            | わらべ歌で遊ぼう！               |
| 美術教育講座 加藤 可奈衛 先生<br>美術教育講座 渡邊 美香 先生   | 和紙プロジェクトの学生        | 和紙づくりに挑戦しよう！<br>紙で遊ぼう！  |
| 学校教育講座 水野 治久 先生                       | 台湾プロジェクトの学生        | 学ぼうさい(防災)               |
| 職場見学時の担当部署                            | -                  | 職場見学                    |
| -                                     | 保育学の院生             | 3日間とおしての協力者             |

**目的**

本学における託児ニーズは、男女共同参画に関する意識調査(2015.11)から、その必要性と重要性が明らかとなったが、うち学内保育所については、他大学視察調査(2015)を経て、《経費面及び地理的問題》から設置は難しいとされた。

そこで、本学の実情に即した子育て支援策としては、大阪教育大学独自の魅力を体験できる、「短期間の託児プログラム」が有効ではないかと考え、プログラム構築のため実践活動を行った。

また、本活動につき独自性のある取り組みとして積極的に広報活動を行い、本学学生の優秀さをアピールすることで大阪教育大学のイメージアップに貢献することを目的とした。

**方法**

短期託児プログラムを構築するための実践的な試みとして、小学生の長期休みに合わせた8月7日(月)～9日(水)の平日で、《大阪教育大学の多様で魅力的な体験活動を含む託児サービス》について、3日間のプログラムとして実施を計画した。利用対象者は、5歳～小学6年生までの子どもを持つ教職員・学生とし、学内グループウェアやポスター掲示等により広く利用者を募った。託児プログラムのため、職員・学生は子どもと一緒に出勤(通学)し、通常どおり勤務・学習することができる。

なお、託児活動としての体験プログラムは、本学学生スタッフに、企画から運営までのすべてを主として担っていただいた。実施場所としては、本学には保育室等がないため、会議室・講義室・実習室等を利用し行った。(幼児用の休憩室として家政教育講座の保育実習室を提供していただいた。)

**結果**

3日間連続のプログラムを計画していたところ、急遽、台風による気象警報の発令により1日

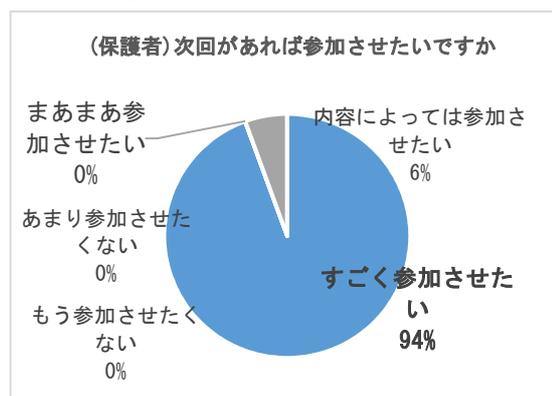
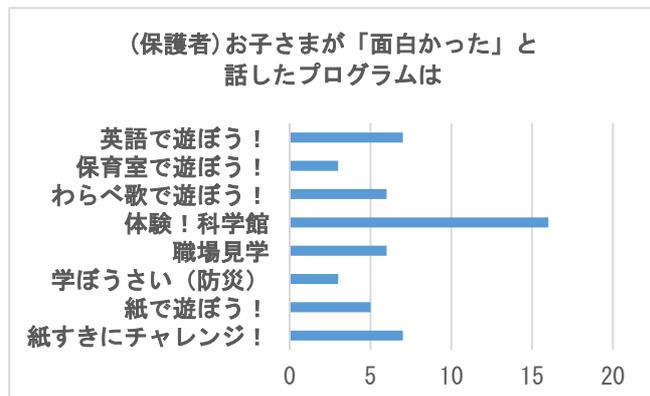
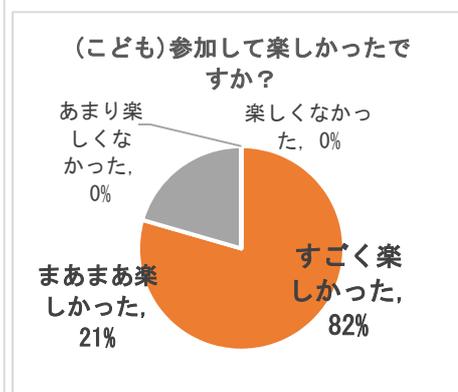
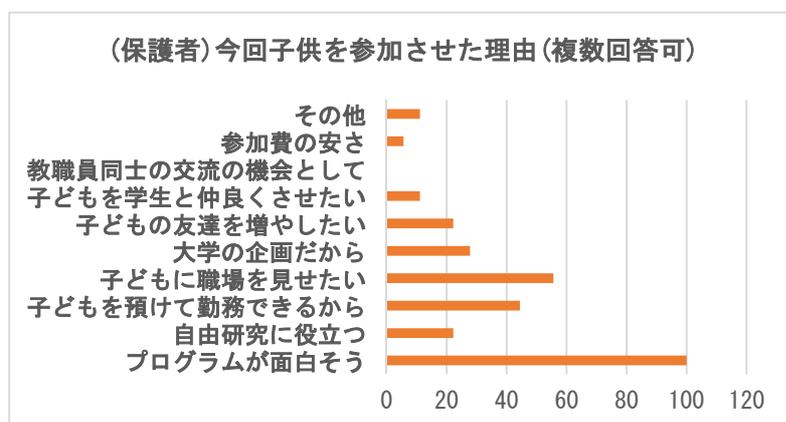
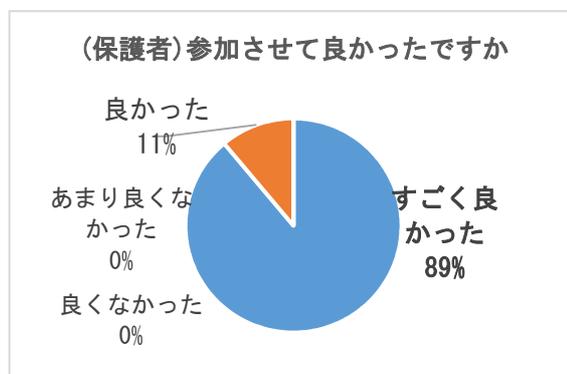
目は中止となった。緊急時の対応を事前に準備しており、学外からのメール送信により対応し大きな混乱はなかったが、託児プログラムという性質上、夏のプログラムのため熱中症対策なども含め、緊急時の対応は今後より一層検討していく必要がある。

なお、台風で中止となったプログラム（泥団子づくり・虫取り）については、先生方をはじめ学生の協力をえて、8月30日に実施することができた。

プログラムの計画時には託児活動の担い手として学生スタッフが主となり運営することへの若干の不安があったが、今回は学外での指導実績や経験豊かな学生が多かったため、この点は特に問題はなかった。今後、経験の浅い学生をスタッフとして起用する場合には、事前研修を念入りにするなどの対策が必要かもしれない。

反省点としては、体験プログラム以外の時間帯について（プログラム開始前後の待ち時間など）、子どもの数に対しスタッフの数が少なく対応が難しかったため、今後の課題であると思う。

なお、プログラム実施後に、保護者・子ども向けにアンケート調査を行った。（以下、抜粋）



## 考察

子育て中の親にとって子どもの幼児期から学童期への移行期は、仕事と子育ての両立が難しくなる時期である。学童保育所はおよそ保育所よりも開設時間が短く（いわゆる小1の壁）、また長期休みには子どもに有意義な体験をさせたくても難しい状況がある。

参加した子どもからは「夏休みの楽しい思い出になった」「お父さんお母さんの働いているところが見られて嬉しかった」などのコメントが寄せられました。保護者からは、「来年も続けていただきたい。」「次年度以降も続くようであれば協力したい」「自分が勤務しながら、様々な体験やものづくりを経験させていただき有難い」との声をいただいております。本プログラムは子育て中の教職員の家庭生活の充実、職場環境の向上に大きく貢献するものと推察される。

また、プログラム実施後には、大学ウェブページ・公式フェイスブックへの掲載、文教ニュースへの寄稿を行い、体験プログラムとして実施した理科教育専攻の手作り科学館や、自然研究専攻と理科教育専攻の昆虫採集体験、家政教育専攻の光る泥団子づくり、音楽教育専攻からはわらべ歌の歌唱指導、英語教育専攻の学生による英語の歌やアクティビティ、美術教育専攻の本格的な和紙づくり体験などを紹介した。

本学学生の優秀さをアピールすることで大阪教育大学のイメージアップに繋がったものと考えられる。